

いぶき

4

2006年 3月23日 発行



第4回国際学生セミナーの口頭発表風景
このセミナーは2006年3月6日～9日にわたって21世紀COEプログラムにより開催されました。関連記事を7ページに掲載しています。

目次

研究科長挨拶	西田栄介	2
生命科学研究科シンポジウム報告	石川冬木	3
新任教授紹介	藤田尚志	4
話題	永尾雅哉・河内孝之	4
	稲葉カヨ	5
	清光智美	6
	橋本康史	7
	泉井 桂	8
学生の広場	木嶋恭子・吉田 卓	9
人事異動		11
編集後記		11

2006 「いぶき」 ご挨拶

生命科学研究科長

西 田 栄 介



京都大学大学院生命科学研究科が誕生してから、今年の3月で7年が経過しました。その間、多数の修士と博士を順調に輩出し、日本、世界の各地の多方面で京大生命科学研究科出身者が活躍し、その存在感が少しずつではありますが、確実に見え始めていて大変うれしく感じています。生命科学研究科への入学希望者も増加傾向にあります。一緒に研究を進め、学会発表や論文投稿をともに行った共同研究者は、先生であれ、同僚であれ、あるいは先輩後輩であれ、卒業後においても交流が続くものです。10年後、20年後にも“同窓”としての交流とコミュニケーションが持続することを願っています。過去をふり返ってなつかしむというような、いわゆる同窓会は好きではないという人もいるかもしれませんが、後ろ向きではなく、前へ向かっての交流の出発点と捉えてみてください。人とのつながりほど大事なものはないと私は思いますので、是非大切に育ててほしい、また育てていきたい、と思っています。

ところで、生命科学研究は今、一つのピークを迎えているのではないかと思います。大きなピークですから頂上も広く、動物、植物、微生物、そしてヒトに至るまで全ての生命の諸現象諸原理を理解し解明しようとする生命科学に下降線へ向かうおそれはないように見えます。しかし、漫然と日々のルーティンの実験、研究をこなしているようなことがもしあるとすれば、科学研究のダイナミズムを失ってしまうかもしれません。直面している研究課題の追求を全力で推進させる一方で、生命科学研究の新展開を切り拓くような、真に独創的でコンセプチュアルな革新をもたらすような研究を行っていききたいと私共は思っています。是非、一緒にがんばりましょう。そのためにも、もちろん一人一人の努力と能力が基本ですが、人とのつながりを通しての切磋琢磨が必要であると思います。人とのつながりを深めることは、個々の人間の世界の広さと深さを拡大することにもつながると私は思っています。

とりわけ寒かった今年の冬もそろそろ終わりに近づき、暖かさが感じられるようになってきた3月にこの文を書いています。心も体も暖めて柔らかくして、新たな一步をまた踏み出しましょう。

第7回生命科学研究科シンポジウム報告

統合生命科学専攻細胞周期学分野

石川 冬 木

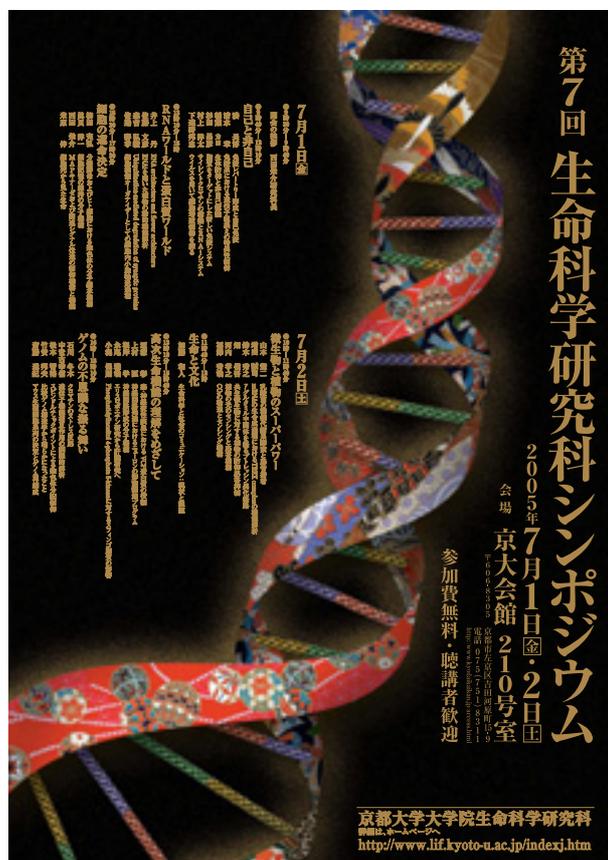
第7回目の開催を迎えた恒例の生命科学研究科シンポジウムは、2005年7月1-2日(金・土)にかけて京大会館で開催されました。いうまでもなく、本シンポジウムは、研究科に所属する全研究室が、原則として未発表データを中心に最も最先端の研究成果を報告し、広く意見交換を行い、研究科のアクティビティをさらに一層高めることを目的とするものであります。今回は、「自己と非自己」、「RNAワールドと蛋白質ワールド」、「細胞の運命決定」、「微生物と植物のスーパーパワー」、「生命と文化」、「高次生命機能の理解をめざして」、「ゲノムの不思議な振る舞い」の7つのセッションにおいて、2日間活発な発表、質疑が行われました。

今年は、あやしい(?)ポスター(写真1)を全国の大学、研究所に掲示をお願いし、本研究科、本学他部局はもちろん、北は東北地方、南は中国地方に至る広い地域よりのべ300余名の参加者を集めました。

例年通り、1日目のシンポジウム終了後は懇親会が開催され、写真2に典型例を示すような真剣なディスカッション(?)とわきあいあいの歓談が行われました。

本年からの試みとして、第2日目の土曜日のシンポジウム終了後、一部の研究室は研究室公開を実施し、大学院入学志望者等の見学、相談を受け入れました。

生命科学研究科シンポジウムも回数を重ねて全国的にもだいが浸透してきたように思えます。同様なシンポジウムは全国的に見ても例がなく、本研究科のシンボルとなりつつあります。本シンポジウムが研究科研究室の研究の場として益々機能するよう、次回はさらに盛会となることを祈念して、第7回シンポジウムの報告とさせていただきます。



第7回生命科学研究科シンポジウムポスター



シンポジウム後の懇親会で楽しいディスカッションにうち興じる参加者

新任教授紹介



ご挨拶

統合生命科学専攻細胞情報動態学分野

ふじ た たか し
藤 田 尚 志

平成 17 年 9 月よりウイルス研究所へ赴任いたしました。生命科学研究科の協力講座として統合生命科学専攻細胞情報動態学分野を担当させていただき事になりました。それまでは(財)京都医学研究機構・京都臨床医学総合研究所で抗ウイルス自然免疫機構の研究を行っていました。そこでの 12 年余りの研究では研究職員のほかに都内の大学からの卒研究生、大学院生、合わせて 20 人ほどの方々と共同研究を行ってきました。私がいた頃は未だ正規に大学生、院生を受け入れる制度が充実しておらず、学生さんもどこか主役というよりはお客さん、といった感じでした。京都大学では学生が主体となって計画、実行するプログラムがいくつか有ると聞いています。また、研究室の構成も学生が主となるという事で大いに期待しております。

我々の研究のキーワードはウイルス感染、自然免疫、インターフェロン、2 重鎖 RNA、RNA ヘリカーゼ、といったことで、特に免疫と RNA ヘリカーゼの接点を発見したことを独自の点としてアピールしてゆきたいと考えています。特に医学、免疫学という事にこだわらず、様々な分野との関連で生命科学を楽しみながら進めてゆきたいと考えています。

10 月から研究室が一応動き始めていますが、今は私の他には大学院生(D1、早稲田大学大学院生命理工学専攻)2 人だけの小さな所帯です。18 年春には数人がさらに参加してくれる予定です。ウイルス研本館にこられる事があれば、4 階(東側)にもお立ち寄りください。

話題



農学・生命科学研究棟

統合生命科学専攻生体情報応答学分野

永 尾 雅 哉

統合生命科学専攻遺伝子特性学分野

河 内 孝 之

農学・生命科学研究棟は、吉田キャンパス北部構内の農学部総合館の道を挟んで北側に平成 17 年 3 月に完成した。建築に際し、建築場所にあった柿の木の挿し木を成功させ、その後に遺跡調査を終えて、建築に取りかかった。鉄骨鉄筋コンクリート造、地上 8 階地下 1 階の建物である。農学研究科と同居の建物で、延床面積約 12,023m²のうち、生命科学研究科の面積はその約 8 分の 3 である。1 階中央のホールの壁には様々な品種の柿の葉の形のレリーフが 2 階にかけてはめ込まれている。北側は五山の送り火で有名な松ヶ崎の妙法が正面に見ることができ、8 階からは南側に京都駅も眺めることが出来る。生命科学研究科は主として 6 階以上に位置し、6 階に分子応答機構学分野、生体情報応答学分野、7 階に微生物細胞機構学分野、分子代謝制御学分野、8 階に遺

伝子特性学分野が配置されている。6～8階に共通利用できる部屋を設け、各分野から機器類が、目的別に集められ、お互いに利用できるようにしている。地階には生命科学遺伝子RI実験室、1階には約60名を収容できるセミナー室がある。8階には、生命科学研究科と農学研究科を管理部門として、植物栽培のための環境制御温室が設置された。これは、戦後の食糧難を背景に昭和20年代に設置され永年活用されていた植物栽培設備を再整備したものである。南側には太陽光を利用したガラス温室、北側には光強度、日長、光質、温度、CO₂などの環境要因を厳密に制御できるプレハブ栽培スペースが機能的に配置され、遺伝子組換え植物も含めて植物体の育成実験が可能となっている。

この農学・生命科学研究棟は、南部構内に完成した医学・生命科学総合研究棟とともに、生命科学研究科の研究活動と交流の拠点となるものである。器に魂を入れるべく、研究活動への積極的な活用が期待される。

末筆ながら、農学・生命科学研究棟の建築にご尽力頂いた皆様に感謝致します。

医学・生命科学総合研究棟 (南部総合研究棟)

高次生命科学専攻生体応答学分野

稲葉カヨ



生命科学研究科創設以来念願としてきた研究科の建物の一つとして、医学・生命科学総合研究棟が南部医学部構内に昨年度末に完成しました。外観の写真は、研究科の概要(2005-2006)の表紙に使用されています。この建物は、京都大学では桂キャンパスの総合研究棟Ⅴ、福利・保健管理棟に続く3件目のPFI(Private Finance Initiative)整備事業で建築されたものです。PFIとは、施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用して行う手法です。そのため維持管理担当者が常駐し、建物に付帯した設備の維持管理や共通部分の清掃等も定期的に行われています。

医学研究科・社会健康医学系8分野の引っ越しが完了した4月中旬から連休にかけて、細胞認識学分野(上村教授:1F)と高次遺伝情報学分野(米原教授:5F)がウイルス研究所から、生体システム学分野(根岸教授:1F)が薬学部から、細胞周期学分野(石川教授:4F)、遺伝子伝達学分野(中世古助教授:4F)、生体応答学分野(稲葉:5F)が理学部から転入しました。統合生命科学専攻と高次生命科学専攻からそれぞれ3分野が、引っ越しをしたことになります。

この建物には、女子学生と女性職員のための健康に配慮した休憩室も確保されています。一方、当初予定した研究科のSPF(Specific Pathogen-free)動物飼育施設については、予算を確保できなかったためこれまで空き室となっていました。ところが、研究科の講義や21COEの英会話教室、種々の会議に使用してきた講義・研究棟(旧分子工学棟)の1-3階を明け渡さなければならなくなり、これらの施設を医学・生命科学総合研究棟に移すことになりました。1月中旬に工事も完了し、什器類の搬入も済ませ、2月からは研究科の会議等のために使用されています。来年度からはこの建物で一部の講義や21COEの英会話教室が行われます。卒業生の皆さんも、機会を見つけてこの新しい建物を訪問してください。各階には、快適な談話コーナーも設けられています。



第一回生命科学研究科・ ウイルス研究所学生 フェスティバルを終えて

生命科学研究科遺伝子伝達学分野 D2

清 光 智 美

2005年10月7日、第一回生命科学研究科・ウイルス研究所学生フェスティバルが開催されました。これは生命科学研究科とウイルス研究所の大学院生を主体とする研究発表会および交流会で、研究発表を通じて交流を深めたい、第三回国際学生セミナーで行われたような熱気ある討論を今後も継続したい、との希望から学生有志で立ち上げたものです。幸い21世紀COEプログラムの後援を頂けることとなり、京都大学時計台国際交流ホールにおいて盛大に行うことができました。

今回は第一回であるにもかかわらず、M1の学生から助手の先生まで幅広く39題もの応募がありました。午前中に6題の口頭発表を行い、午後は5時間かけて、39題のポスター発表を行いました。約200名の来場があり、どのポスターにも人の山ができる程の盛況ぶりでした。熱気ある討論、異分野の研究交流という目的は十分達成されたと思います。また大学院生以外にも、学部の4年生やポスドクの方々の来場もあり、より幅の広い研究交流の場になりました。夜にはポスター会場での懇親会(会費制)を行い、21時までの3時間、お酒を飲みつつ、心ゆくまでディスカッションを楽しむこともできました。当日の様子はHPで見ることができます(<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/coe.festival1st/>)。

来場者によるアンケートの結果を見ても、「学生主体で雰囲気良く、質問しやすい」、「日頃ほとんど研究室間の交流がないので、この機会にその他のラボの学生と研究交流、情報交換できるのがよい」、「お互い発表を通して意識を高めていけるのがよい」など、そのほとんどが肯定的な意見でした。今後は、発表者の研究室ごとの偏りがなくなり、より多くの学生が自主的に参加するようになればいいと思います。「今後も是非継続して欲しい」という声も多数寄せられていますし、企画する私たちも、是非この会を継続させたいと考えています。現在、第一回の実行委員数人が中心となって第二回学生フェスティバルの準備を進めていますので、興味のある方は是非、芳田剛 tkyoshid@virus.kyoto-u.ac.jp まで御連絡下さい。

個人的にはこの会を通して大変いい勉強、経験をすることができました。また実行委員全員がうまく協力し合えたおかげで、自分たちの実験を疎かにせず、最小限の時間と労力で会を企画運営することもできました。ここで集まったメンバーは委員会を解散したあとも集まってよく飲んだりしています。実験の話以外にも進路のことなど、気軽に話せる仲間ができたのは大変な収穫です。第二回学生フェスティバルでお互いの研究を発表し合えるのを楽しみにしています。

この会を開催するにあたり、多くの方々にお世話になりました。特にCOEワーキング委員の先生方、とりわけ米原伸教授には会の発足当時から大変お世話になりました。また懇親会では多くの先生方にカンパをして頂きました。その他協力して頂いた方々も含め、心から御礼申し上げます。

この会が益々発展して、参加者間の交流を深めるだけでなく、生命科学研究科、ウイルス研究所の研究の発展につながる絶好の機会になればいいと思います。

第4回国際学生セミナー報告

学生実行委員
統合生命科学専攻シグナル伝達学分野

橋本康史

第4回国際学生セミナーが去る2006年3月6日から9日にかけて行われました。これは21世紀COEプログラム「先端生命科学の融合相互作用による拠点形成」の一環として行われ、私達10名の大学院生が実行委員としてセミナーを運営しました。今回は京大内にとどまらず海外からも発表者を招待して国際的な研究発表会を行い世界に広がる研究者同士の交友関係を形成することとしました。招待者は本COEプログラムの先生方を通じて海外のPIの方から御推薦いただきました。

6、7日では海外の招待者20名(大学院生15名、博士研究員やインストラクター5名)と京大から大学院生20名と博士研究員の1名が口頭発表を行い、また京大からさらに70名を加え計110名がポスター発表を行いました。計400名以上が参加し大盛況となりました。多岐にわたる分野の一流の研究室から多数の発表が行われ、様々な分野の非常に興味深い最先端の研究を知り、研究の楽しさや研究への意欲を新たに、自らの研究を省みる良い機会にもなりました。発表内容もレベルが高く、発表者の意気込みが感じられ、質疑応答も活発で会場は常に知的な熱気に包まれていました。口頭発表は著名な計16名の先生方の審査により、ポスター発表は来場者の投票により優れた発表を表彰し、招待者からも京大生からも表彰者が出て双方の研究の質の高さを実感しました。8、9日ではより深くお互いを知り合おうと仁和寺で宿泊セミナーを行いました。事前にアンケートで「科学と文化の関係」「将来について」「研究生活」等に関して日本人と招待者の相違や様子を調べ、それを元にグループディスカッションを行いました。様々な人が交じり合って良い雰囲気の中で意見交換を行い、その後も研究関連から文化まで議論や会話が盛り上がり、招待者、日本人双方の間でさらに親密な交友関係を築きました。

海外の招待者からは多分野の研究が聞けて議論でき、とても興味深かった、京大生からも研究への関心が高められ貴重な経験になったという意見が多くありました。審査員の先生方からも時間的には少しきつかったがレベルが高くすばらしい企画だというご意見をいただきました。どの人達からも今後も続けてほしいと言う声がありました。私達にとってそして他の参加者にとっても、世界中の同じような境遇の様々な分野の人達と研究交流を行い、お互いの国での研究の様子を語り、交友関係を築いたことはとても刺激的であり、得るものが多く大変有意義なものでした。私達もこのようなセミナーが今後も続いていくことを願っています。次の機会にはポスターの発表時間が短かった点と1日の発表が時間的に少しきつかった点が特に改善されると良いと思います。最後ですがこの成功を支えていただいた本COEプログラム、たくさんの参加者や招待にご尽力いただいた先生方そして運営にご協力いただいた方々に感謝いたします。

(ホームページ：<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/coe4th/>)





近況報告—京都から和歌山へ—

前 統合生命科学専攻代謝制御学分野

泉 井 桂

2005年3月に定年退職した泉井です。

京都大学には、学生時代も含めて40年余、本当に長い間お世話になりました。

理学部化学教室の生物化学研究室、続いて農学部農林生物学科応用植物学研究室、そして2度の改組を経て生命科学研究所に在籍しました。これまでを振り返ってみれば、多くの個性豊かな学生諸君と接触することができ総じて大変楽しく有意義だったと感謝しています。京都大学でとくに有難かったことは、何か自分で新しいことに挑戦しようとしたときに、その都度、学部の隔てなく、どなたかの先生の温かい手ほどきや助言をいただけたことでもあります。このことは、私が実感した“自由な気風の京都大学”でありました。若い在学中の皆さんには、伸び伸びと新鮮な発想を大切に、失敗を恐れず、研究を主体的に発展させていただきたいと願っております。京都大学は素晴らしい受け皿になってくれることでしょう。

退職後は4月から、近畿大学生物理工学部へ赴任し、細胞工学研究室を担当することとなりました。この学部は和歌山県の北部、紀ノ川の北側の山地に位置し、キャンパスは大変美しく、リゾートのようによく手入れされています。近畿大学の本部は東大阪市にあり、11の学部、17の研究所、病院、原子炉などを各地にもっています。私はこれらの研究所の一つ、先端技術総合研究所、にも併任となりました。この研究所には、組換え体植物用の大きな温室もあるのですが、約25 kmもはなれた海南市にあり、日常的に行き来するにはやや遠い感じです。でもこれから利用できればと思っています。近畿大学といえば、マグロの人工飼育の成功、ハウレン草の脂肪酸不飽和化酵素遺伝子を脂肪組織で発現させたトランスジェニックブタの作出などで有名ですが、これらはそれぞれCOEに採択され、後者のプロジェクトは生物理工学部が主体となっているようです。入谷明先生(京都大学農学部名誉教授)をリーダーに大いに意気が上がっています。

さて、こちらでの大学生活ですが、生物理工学部は6つの学科からなり、学生は1学年約400名です。私の属する生物工学科はそのうちの約90名です。1,2回生で大部分の専門科目を履修し、3回生からは名目上研究室に所属します。1研究室あたりの受け入れ人数は、教授と助教授の2人いる研究室では、各学年12名ですから、それだけで大所帯となります。京大の農学部では4回生の分属定員は4人まででしたから大変な違いです。でも、残念ながら4回生の多くは就職活動やアルバイトなどで忙しく、あまり研究室へ来ないので、実験室は閑散としています。なんとかアクティビティーを上げたいものです。教員は講義や演習などで結構忙しく、名目上週10コマ近く学生・院生に接触することになっています。研究の方はまだ遅々としていますが、少しずつ体制が整いつつあります。ひきつづき、C4光合成と炭酸固定酵素の基礎研究およびホルムアルデヒドを吸収除去する植物の作出、C3植物のC4化などの応用研究を目指しています。

私は今年の4月から単身赴任し、自炊(?)生活を始めたわけですが、田舎での生活は、自分には新鮮で大いに楽しんでいます。この地は自然が豊かであるばかりでなく、歴史も古いので、あちこちよく出かかっています。近くには、1万人の僧兵を抱えていたという根来寺、西国三番札所の粉河寺、それに1804年に世界ではじめて全身麻酔に成功した華岡青洲の医塾「春林軒」などがあります。青洲は、京で3年間医術を学んだのち、郷里に帰り、「唯思起死回生術」すなわち、難病中の難病を治すことを決心したということです。犬だけでなく、最後には母や妻を実験台にしたことは小説などで有名ですが、いわゆる実験医学の先駆けでもあったそうです。「内外合一活物窮理」ということばも残しており、多くの学ぶべきことがあります。

京大にいた頃よりストレスが減ったのか、ヘボ歌、ザレ歌がよく浮かびます。

“我が山は 空気は美味し 星は満つ ヘボ和歌誘う 美し和歌山”

“あちこちに 妻の配慮の 有難く 楽しからずや 単身赴任”

“紀ノ川の 向こうに座する 龍門山 遅まきながら 登りなんいさ”

“ コンビニで 我が餌を漁り プラがらで 貝塚築く われ西三谷(タール)人 ”
“ 馥郁の 梅に塩して 納めけり 甕を覗きて 揺する毎日 ”
“ 顔洗う キッチリもろてに 水受けて 今日の日 愛の満てるを ”
(と思って大学へいくと、学生に約束をすっぽかされ、小さい頃の私のオハコも)
“ 来ぬ学生 待つをの山の 研究室 焼くやスルメの イカリ焦がれつ ”
となります。お粗末さまでした。

この地域は瀬戸内海気候帯にあり、地震の中央構造線も四国とつながっています。京都よりずっと温暖です、“ ヒコバエの稔りを享けて群ら雀 ”。果物が大変豊富で、魚もまた大変美味しいところ
です。是非一度こちらへおいで下さい。ご案内いたします。

末筆ながら、生命科学研究科の皆様の益々のご活躍を祈念いたします。

学生の広場

「転機」

統合生命科学専攻微生物細胞機構学分野

木 嶋 恭 子



今年度は私の所属する微生物細胞機構学研究室にとって大きな転機となる年であったと思います。研究室の引っ越しという大イベントを経験したのです。約一ヶ月間実験はほぼストップし、総出でくる日もくる日も荷物の整理や機材の運搬にあたりました。狭い部屋に所狭しと荷物が積まれ、皆でひしめくように過ごしていた実験室には想像以上にたくさんの「時代もの」が眠っていました。先輩方の残していった実験ノートの山、いつのものかも分からない古い試薬、今やもう時代遅れで使わない機器の部品、よく見ると実験台もぼろぼろ……。歴史を感じさせるものと出会い感慨にふける瞬間もたくさんありました。そして惜しみながらそれらの多くを処分しました。そのかわりと言っては何だけれど、私達は多くのものを得ました。広く快適な研究環境、窓からの眺め、新しいご近所さんとの関わり。そんな引っ越しを通じて考えたこと、それは今の私たちは過去の諸先輩方の築いてくださった歴史の上に成り立っていて、こんなちっぽけな私でも今後の後輩のために何かを担っているのだということでした。

このことに気付いて以来、それまでは表面的だった研究の目的や意味に対する考えが少し深まった気がしています。私個人にとっても引っ越しは転機となる出来事でした。このような機会に出会えたことと現在の素晴らしい研究環境を与えてくださったことに感謝しています。

研究室の国際化

高次生命科学専攻生体制御学分野

吉 田 卓



本研究科は、英会話講座の開講や学生国際セミナーの開催と英語教育にかなり力を注いでいますが、研究室単位での英語教育の位置付けは千差万別でしょう。そこで、私の研究室の例を紹介しようと思います。現在、共同研究者として医学研究科免疫ゲノム医学講座で日々の実験を行っていますが、計9名の外国からのポスドクあるいは大学院生が研究に参加しています。大抵の研究員は日本語が話せず(話す気も無さそう)、ミーティングばかりか新歓合宿や忘年会といったイベントも当然英語で行われます。英会話があまり得意でない私にとって、当初はすごくストレスを感じる環境でしたが、慣れとは怖いもので今では彼らとの議論を積極的に楽しんでいきます(私の英語力は依然として怪しいですが)。

もちろん、留学生の母国が英語圏とは限らず、文法やイントネーションが明らかに変な時が多々有るので、21世紀COEの英会話講座で学習するような綺麗な英語の手本としては不十分な面もあります。しかし、人前で英語を話す度胸を身に付け、下手ながらも何とか意思疎通するためのコツを学ぶには、毎日接する彼らは最適な練習相手ではないでしょうか。幸運にも今年のキーストンシンポジウムに参加する機会を得たので、恥ずかしがらずに日頃話している下手な英語を駆使して、思う存分議論を楽しんできたいと思います。

教員人事異動

年月日	異動内容	所属・職等		氏名
		新	旧	
17.2.8	育児休業	(高次応答制御学 システム機能学分野 教務職員)		山銅 ゆかり
17.3.31	定年退職	京都大学 研究員 (生命科学研究所 教授(特任))	遺伝機構学講座 遺伝子伝達学分野 教授	柳田 充 弘
17.3.31	定年退職	近畿大学 生物工学部 教授	環境応答制御学講座 分子代謝制御学分野 教授	泉井 桂
17.3.31	定年退職	(財)大阪バイオサイエンス研究所長	認知情報学講座 高次脳機能学分野 教授	中西 重 忠
17.3.31	転出(辞職)	石川県立大学 生物資源工学研究所 講師	応用生物機構学講座 分子応答機構学分野 助手	片山 高 嶺
17.3.31	転出(辞職)	広島大学 大学院理学研究科 助教授	環境応答制御学講座 分子代謝制御学分野 助手	古本 強
17.3.31	転出(辞職)	米国 post doctoral researcher	認知情報学講座 高次脳機能学分野 助手	北野 潤
17.4.1	育休復帰	(高次応答制御学 システム機能学分野 教務職員)		山銅 ゆかり
17.9.1	採用(協力講座)	細胞機能動態学講座 細胞情報動態学分野 教授	東京都臨床医学研究所腫瘍細胞研究部門室長	藤田 尚 志
17.10.1	採 用	遺伝子機構学講座 遺伝子動態学分野 助手	(独)科学技術振興機構 研究員	齊藤 博 英
17.9.1(10/22)	昇任(協力講座)	細胞機能動態学講座 信号伝達動態学分野 助教授	ウイルス研究所 細胞生物学研究部門 助手	立花 誠
18.1.1	採用(転任)	応用生物機構学講座 分子応答機構学分野 助手	大阪大学 微生物病研究所 助手	芦田 久
18.1.31	転出(辞職)	(独)科学技術振興機構(さきがけ専任研究員)	多細胞構築学講座 シグナル伝達学分野 助手	森本(豊島) 文子
18.2.1	採 用	多細胞構築学講座 シグナル伝達学分野 助手	多細胞構築学講座 シグナル伝達学分野 研究員	日下部 杜央

編集後記

私が、いぶきの編集担当であると連絡を受けたのが年も押し詰まってからで、それからバタバタと編集作業を始めました。それにもかかわらず執筆いただいた方々のおかげで、いぶき4号が無事にできあがることとなりました。御礼を申し上げます。年度末ぎりぎりの発行となりましたことから、総務と経理にもご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。

(鈴木 秀之)